

『實用英會話の秘訣』の発音表記に関する一考察
— カナ表記でどこまで英語音に近づけたのか —

A Study of English Phonetic Notation in *Jitsuyou Eikaiwa no Hiketsu* :
How the Book Approximates English Pronunciations in *Katakana* Letters

藤 上 隆 治
Ryuji Fujikami

要旨

本稿は、約86年前の英会話表現の文献『實用英會話の秘訣』⁽¹⁾に掲載されている英語発音について、音変化がどのように記述されているかを主に文強勢の視点から分析したものである。分析結果から、音変化をできるだけ近似的に記述していることが分かった。しかし、この近似的なカナ表記には文強勢の位置が示されていないことを指摘し、86年前のカナ発音表記に文強勢の位置の提示を試みている。この試みにより、学習者に英語の強弱リズムで英語を読ませることが可能になるとの考えを示している。

はじめに

英語発音のカナ表記は1613年にイギリス国王のジェームズ1世 (James I) の親書の日本語訳にすでに見られる (例: James [ぜめし]、Westminster [おしめした]、Ireland [ゑらんだ] 〈豊田1939: 196、杉本1999: 26〉)。鎖国で一旦英語も「国外退去」になったが、いわゆる「安政の五カ国条約」が締結され、日本が開国すると、英語が日本に再上陸した。そして、アルファベットに慣れていない人々に対して、とにかく英語を読ませるようになるために、英語の文献に発音記号としてカナを工夫して用いた。例えば、『英米対話捷徑』(1859)、『増訂華英通語』(1860)、『ゑんぎりしことば』(1860)、『和英商話』(1862) など多くの英語の文献にカナ発音表記が用いられた。その後、時代が下るにつれ、Webster 表記、Romic 表記、IPA 表記、respelling 表記などが誕生した。いまでは、カナ表記と IPA 表記の2つにほぼ集約されている。

カナ表記に限って言えば、英語の音素文字を子音と母音の組み合わせである日本語文字で表そうとすること自体に無理があるという意見がある (例えば、チャンプレン

1893:3、岩崎1919:iii、長谷川1998:123など)。音声体系が異なる日本語と英語では、言語学的にはカナによる正確な英語音の表記は難しいからである。

しかし、近似的な英語音の表記であれば、コミュニケーションを取る上でカナは有効な手段であるとの積極的な意見もある（例えば、一矢1929、島岡1998など）。1613年以來、今日までおよそ410年間廃れずに使われ続けていることからすると、カナ表記は言語運用面から有効であるように思う。

今回はいまからおよそ86年前に発行された英会話の文献『實用英會話の秘訣』の「實地の英語」に焦点を当てる。英語会話を一般大衆にも広げようとするために、カナで実際の音に近い発音を表記しているからである。会話表現が中心の文献なので、文強勢の観点からカナ表記の特徴を探る。そして、本稿の構成を次の4点とする。

1. 言語運用面から見たカナ表記
2. 文強勢
3. 『實用英會話の秘訣』の特徴的なカナ表記
4. 分析・考察

I. 言語運用面から見たカナ表記

1. 外国語学習におけるカナ表記の活用

英語は文字と発音が必ずしも一致しないその最たる言語の1つである。発音を示すために、文字と発音の関係を示したフォニクスという方法もあれば、IPAで発音を表記するという方法もある。そして、カナで発音を表記するという方法もある。さらには、英英辞典に見られるように綴りを用いた respelling という方法もある。

いずれの場合でも、発音表記を見て、正確に英語音を再生するには、相当の集中的な訓練が必要であると思う。しかし、一般的な英語学習者であれば、英語の原音に近い音あるいは非母語話者にも通じる発音が再生できれば、言語運用上、十分であると考えられる。そして、そのためのカナ表記は「あくまでも英語音を再生するきっかけとして用いるのであって、そのまま日本語式に読むのとは異なる」（小菅2004:83）のである。静（1996:52）も「IPAの正確な読みとりには専門的な知識が必要である。学習者が精密表記を読むことは不可能に近く、簡易表記は誤解を招きやすい。現実的にかつかなり有効と思われる代替手段はカタカナによる表記である」と述べている。

現代の World Englishes の時代、言語学的にカナ発音表記には無理があり発音指導に不適だとするか、近似的な表記でも最低限通じるようにするかのどちらかに軸足を置いて音声指導にあたることが求められるとするならば、筆者は後者を選択する。

2. 外国語学習における母語の活用

外国語の音声学習の際に、聞いたことがない音は母語の音に似た音に置き換えたり、母語の音体系に組み込むことがある。これは母語に依存している証拠であり、むしろあえて母語を活用することは、外国語学習に必要なと思うのである。例えば、眞砂 (2004: 37) は「外国語学習において、学習者の母語（以下 L1 と記す）と学習対象言語（以下 L2 と記す）の音韻体系の差が、聞いた音の模倣・再現を妨げるのである。学習者にとってこの差を埋める簡単で有効な方法は、L2 に対する L1 の「近似音」を利用することである。L1 を捨てるのではなく、利用するのである」と、外国語学習における母語音の活用は有効な手段であると述べている。一矢 (1929: IX-X) も、「仮名文字の使用は英語学習上酷く嫌はれてゐた。成程この考へ方は尤もである。英語の発音には日本の仮名文字にないものが多数ある。然しながら、それと同時に英語の発音には日本の仮名文字と共通してゐる音も亦少なからずあることを見逃すことは出来ない。又或る場合には漢字の方が仮名文字よりも更に英語の発音に近い音を知らしめる。」と述べ、母語を活用することも一案であるとの見解を示している。いずれも母語を活用することに意義があるとの見解を示している。

一方、カタカナで外来語を表記し、それを発音しても通じないから、カナ表記は英語の発音にマイナスの影響を及ぼすという風潮があるとするならば、それは違うように思う。外来語のカナ表記は、ほぼ文字通りに読んだままの音がベースになっていることが多い。例えば、American 「アメリカン」、hospital 「ホスピタル」、vanilla 「バニラ」などは、それぞれ「メリケン」「ハスペラ」「ヴァネイラ」のようにカナ表記できる。さらに、[メリケン][ハスペラ][ヴァネイラ]と強弱リズムで発音すれば、通じる度合いは増してくる。英語初学者や一般大衆にとっては、カナも「発音記号」の1つであると言っても差し支えないと思う。日本語と英語は異なる言語であるから、異なる部分があるのが当然である。しかし、異なる言語同士であっても、類似点はある。言語学習において、異なる部分を強調するよりは、外国語としての英語学習上、必ず頼る母語（日本語）との共通点あるいは類似点を強調する方が、学習者は安心できるのではなからうか。発音も然りであると思う。

II. 文強勢

1. 内容語と機能語

文強勢を考えると、内容語と機能語の存在を知っておくと、英語の強弱リズムを作りながら、音読する際に1つの目安となる。内容語とは、名詞、動詞、形容詞、副詞、疑問詞、指示代名詞、数詞など、句や文の中で伝達したい意味内容を持っている語である。一方、機能語は、句や文の中で文法的な機能（役割）を果たす語である。

機能語とは文字どおり、be 動詞、助動詞、前置詞、冠詞、代名詞、再帰代名詞など、内容語以外の品詞が機能語に該当する。伝達したい内容をはっきりと発音するという考えから、文の中で強勢が置かれる単語は内容語であり、その単語固有の強音節の位置に文強勢を置く。例えば、“The gentleman whom you met in my office is his father.” (片山他2008, 83) ならば、“The **GEN**tleman whom you **MET** in my **OF**ffice is his **FA**ther.” というように発音する (大文字の部分が強勢の位置)。

2. 機能語の弱音形

機能語と呼ばれる単語には2種類の発音形態がある。1つは強音形である。単語として単独で発音される場合の発音形である。そしてもう1つは通常の発話文の中で発音される弱音形である。では、なぜ機能語に弱音形が存在するのかを考えてみたい。英語は強弱リズムの言語である。つまり、「強」の部分は強く長く発音され、「弱」の部分は短く弱く曖昧に発音される。文を1つの長い単語として考えると、内容語を強く発音し、機能語を弱く発音することは強弱リズムを作り上げる上で、自然な現象であると考えられる。従って、「弱」の部分に当たる機能語の強音形が弱音化すること (weakening) によって、弱音形ができると考えられる。小栗 (1980: 154-167) や O'Connor (1980:92-94) は、and[ænd]→[ənd][ən][nd][n]、can[kæən]→[kən][kn]、of [ɒv]→[əv][v][ə][f]などの例を挙げている。

他にも、JAPANESE GOVERNMENT のように、第2強勢が第1強勢の役割を演じる場合や、意味上の対比 (例：“Do you import the merchandise or **EX**port it?”)、新情報の提供 (例：“Who visited Michigan last year?” “**MA**ry did.”)、伝達情報の焦点化 (例：“Tom visited **ME** yesterday.”) などにも言及しなくてはならないが、紙数の都合上、別の機会に述べることにする。

Ⅲ. 『實用英會話の秘訣』の特徴的なカナ表記

『實用英會話の秘訣』の「實地の英語」に見られる音声的な特徴はいくつかの項目に分類できる。紙数の都合上、その中から今回は次の7つを取り上げる (例に引かれた下線は藤上による)。

1. 文強勢を通常受けない語句の脱落

You are getting better. [ゲチンベタ]

I am sorry, I don't know. [ソリ、アイドンノー]

2. 文強勢を通常受けない単語の脱落

How much do you want? [ハマチ、ユーワント]

The sooner the better. [スーナーベタ]

pshaw, you are joking. [シヨー、ユジヨキン]

3. 文強勢を通常受けない単語の弱音化

Bring me a cup of tea, will you? [布林ミカプアチー、ウイリユ]

Come and see me sometimes. [カマンシミソムタイム]

Milk and sugar [ミウクンシュガ]

Long and short that is so. [ロングンシヨ、アツソー]

Fetch my cup and saucer, will you? [フヘチマカプアソーサ、ウイリユ]

By and by [バイムバイ]

Look for it up and down. [ルックフオリ、ラップムダン]

4. 調音点が同じ場合の脱落

Get down. [ゲダン] What time is it? [ワツタイムイジット]

God damn. [ゴッダム] Give me some more. [ギミサモー]

5. 弱音節の脱落

Go ahead. [ゴーへー]

6. 同化

(1) 進行同化

Open the door, please. [オープムドー、プリズ]

Who has done that? [フーズダンナット]

(2) 逆行同化

Give me, please. [ギミプリズ]

(3) 相互同化

Beg your pardon. [ベギヨパードン]

Bring me a cup of tea, will you? [布林ミカプアチー、ウイリユ]

What is your name? [ワツチヨネーム]

7. 弾音化

Shut up. [シヤラップ] Get on board. [ゲロンボール]

Shout out. [シヤラウ] Get in. [ゲリン]

なお、以上の他にも「破裂音（[t]と[d]）の未開放」「歯茎音化」「二重母音の長音化」「二重母音の短母音化」「長母音の短母音化」「[ð][v]の脱落」「連続する子音の一部の脱落」といった音変化に対する表記が見られる（資料を参照）。

IV. 分析・考察

1. 分析

- (1) 文強勢を通常受けない語句の脱落に関しては、文頭の語句に見受けられる。

You are getting better. [ゲチンベタ]

I am sorry, I don't know. [ソリ、アイドンノー]

- (2) 文強勢を通常受けない単語の脱落に関しては、助動詞、文中の be 動詞、定冠詞に見受けられる。

How much do you want? [ハマチ、ユーワント]

The sooner the better. [スーナーベタ]

pshaw, you are joking. [シヨー、ユジヨキン]

- (3) 文強勢を通常受けない単語の弱音化については of と and に頻繁に観察される。

- (i) of [ɔv]→[ə]の場合

Bring me a cup of tea, will you? [ブリンミカプアチー、ウイリュ] [ə]

- (ii) and [ænd]→[ən] [n] [ə]の場合

Come and see me sometimes. [カマンシミスムタイム] [ən]

Milk and sugar [ミウクンシュガ] [n]

Long and short that is so. [ロングンシヨ、アツソー] [n]

Fetch my cup and saucer, will you? [フヘチマカップアソーサ、ウイリュ] [ə]

By and by [バイムバイ]

Look for it up and down. [ルックフオリ、ラップムダン]

([バイムバイ] と [ラップムダン] のカナ表記から、and の弱音形[n]が近接の両唇音[p][b]により[n]が[m]に同化されていることも知ることができる。)

- (4) 調音点が同じ音が2つ隣り合う場合、1つ目の音が脱落してしまう。今回は[t] + [d], [t] + [t], [d] + [d], [m] + [m]の組み合わせが観察された。

Get down. [ゲダン] What time is it? [ワツタイムイジット]

God damn. [ゴツダム] Give me some more. [ギミサモー]

- (5) 第1音節が弱音節、特に [ə] の場合、脱落する傾向にある。

Go ahead. [ゴーヘー]

- (6) 同化の3つの現象（進行同化、逆行同化、相互同化）をカナで表している。

- (i) 進行同化

Open the door, please. [オープムドー、プリズ] (open[p]の影響による[n]の[m]音化)

Who has done that? [フーズダンナット] (done[n]の影響による[ð]の[n]音化)

- (ii) 逆行同化

Give me, please. [ギミプリズ] (me[m]の影響による[v]の[m]音化)

(iii) 相互同化

Beg your pardon. [ベギヨパードン] ([g] + [j]の相互作用)

Bring me a cup of tea, will you? [プリンミカップアチー、ウイリユ] ([l] + [j]の相互作用)

What is your name? [ワッチヨネーム] ([t] + [j]の相互作用)

(この例では、文強勢を受けない is が脱落し、What your name? になり、What の [t] と your の [j] が相互に影響し合い、最終的には [tʃ] の音に聞こえたからだと考えられる。)

(7) 弾音化

アメリカ英語に頻繁に見られる音のくずれである。松坂 (2006:132) はこの弾音化の現象を次の2つの場合に起こると述べている。1つは、「語中 (時として語頭) で、直前に母音があり、直後に強勢のない母音があるとき」である。例えば、better [béɾə] のような場合である。もう1つは、「語末で、直前に母音があり、直後にも母音があるとき」である。例えば、at all [əɾəl] のような場合である。

『實用英會話の秘訣』の「實地の英語」では、後者の例が多い。なお、弾音化にはラ行音の文字を使っている。

Shut up. [シヤラップ] Get on board. [ゲロンボール]

Shout out. [シヤラウ] Get in. [ゲリン]

2. 考察

英語文の強弱リズムは伝達内容を持っている単語の強音節が基になっている。森住 (1978:22) は「英米人の言うことが聞き取れなかったり、逆に Pardon? と聞き返される時は英語のリズムが会得されていない場合が大部分であろう」と述べている (他にも田中1968:4、島岡1973:21、小川1978:25、尾崎1993:235、五十嵐2003:415などが同様のことを述べている)。それほど、リズムは大切であり、そのリズムの基になっている強勢の位置こそ、音声によるコミュニケーションでは大切なのである。しかし、『實用英會話の秘訣』の「實地の英語」には、その強勢の位置が明示されていない。

そこで、強勢の位置を明記すれば、英語母語話者および非母語話者に対して通じる度合いが増すであろうと考え、例としていくつかピックアップし、強勢位置の提示を試みる (表1を参照)。

文強勢の位置を明確にすることにより、1つの文強勢から次の文強勢の前までがひとくくりであることを学習者に示すことができる。また、文強勢の位置をフォントの違いで示すだけでなく、このひとくくりを枠で囲ってしまえば、手を1回叩くとどこまで発音すればいいのかがよく分かる。そうすれば、このひとくくりがほぼ同じ間隔

表1 強勢位置の提示（一例）

英文	『實用英會話の秘訣』	強勢位置の提示
You are getting better.	ゲチン ベタ	ゲチン ベタ
How much do you want?	ハマチ、ユーワント	ハマチ、ユーワント
Come and see me sometimes.	カマンシミソムタイム	カマンシミソムタイム
Milk and sugar	ミウクンシュガ	ミウクンシュガ
Give me some more.	ギミサモー	ギミサモー
Open the door, please.	オープムドー、プリズ	オープムドー、プリズ
Beg your pardon.	ベギヨパードン	ベギヨパードン
What is your name?	ワッチヨネーム	ワッチヨネーム
Shut up.	シヤラップ	シヤラップ
Get in.	ゲリン	ゲリン
Get on board.	ゲロンボール	ゲロンボール

で現れるという英語のリズム特徴に則り、1つの塊を同じ間隔で発音しなくてはならないことが分かる。例えば、[ワッチヨネーム]を「ワッチヨ」「ネーム」と、枠で囲ってしまえば、手を2回叩けば発音できることが分かる。

この枠で囲むことについて、藤上（2008:188）は「リズムの枠」を提案し、それを使えば、各塊にある弱音節の数に関係なく、各塊をほぼ同じ間隔で読むことを学習者に視覚的に訴求できると述べている。

以上、『實用英會話の秘訣』の「實地の英語」に記載されているカナ表記を分析・考察した結果、同化、and や of など文強勢を受けない語の弱音化、you are や弱音節の脱落など、英語の特徴を浮き彫りにしたカナ表記が多く観察された。従って、管見ながら、カナ表記は言語運用面では有効であるとの先行研究を支持する立場をとりたいと思う次第である。

おわりに

本稿では4点について述べてきた。まず、言語運用面から見たカナ表記について、外国語学習におけるカナ表記の活用および外国語学習における母語の活用の視点から言及した。

次に、『實用英會話の秘訣』の「實地の英語」に記載されているカナ表記を文強勢の視点から分析するため、先に文強勢の特徴について概略を述べた。

さらに、『實用英會話の秘訣』の「實地の英語」に記載されているカナ表記の特徴を整理した。その結果、機能語の弱音形、同化や弾音化などといった音変化が観察され、その発音がカナで近似的に表記されていた。

最後に、『實用英會話の秘訣』の「實地の英語」に記載されているカナ表記に強勢を加えてみた。これにより、強弱リズムが提示でき、そのリズムで英語を読む術の提示を試みた。

今後の課題としては、カナ表記についてさらに先行研究を調査し、音声学の授業などに活かしたい。また、World Englishes は非英語母語話者にも分かる発音で良い（例えば、田辺1992など）との考えから、言語運用上、カナ表記でも十分である点を述べ、ビジネスで英語を使わざるを得ないビジネスパーソン向けの英語音声指導に役立てたいと考える。

注

- (1) 1927年、横濱英語専修會発行。全78ページ。10～27ページに「實地の英語」が「書物上の英語」とともに掲載されている。

参考文献

- 五十嵐康男 (2003) 「音声英語の文法—強勢、高さ、息つぎの関係—」『成城イングリッシュモノグラフ第36号』東京：成城大学大学院文学研究科。
- 一矢慧 (1929) 『英語の発音に就て』兵庫：福音舎書店。
- 岩崎民平 (1919) 『英語発音と綴字』東京：研究社。
- 小川芳男 (1978) 「英語の基礎を教えるということ」『英語教育5月号』東京：大修館書店。
- 小栗敬三 (1980) 『英語音声学』東京：篠崎書林。
- 尾崎博己 (1993) 「カタカナ発音で英語らしく」『ペトロテック Vol. 16, No. 3』東京：石油学会。
- 片山嘉雄、長瀬慶來、上斗晶代 (2008) 『英語音声学の基礎—音変化とプロソディーを中心に—』東京：研究社。
- 小菅和也 (2004) 「英語発音カタカナ表記の活用」『武蔵野英米文学 VOL. 36』東京：武蔵野大学英文学会。
- 静哲人 (1996) 「自然な速度の発話を聴取する能力を伸張するためのカタカナ表記利用に関する実証的研究」『研究紀要32』福島：福島工業高等専門学校。
- 島岡丘 (1973) 「発音における誤りの傾向—FL Planning の現場から—」『英語教育8月号』東京：大修館書店。
- _____ (1998) 「新「カナ発音表記」に思う—是非と有効性—」『英語教育8月号』東京：大修館書店。

- 杉本つとむ (1999) 『杉本つとむ著作選集 8 日本英語文化史の研究』 東京：八坂書房.
- 田中春美 (1968) 「発音指導における異音の扱い」『現代英語教育 3月号』 東京：研究社.
- 田辺洋二 (1992) 「言語活動「聞くこと」の難易について」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要第 3号』 東京：早稲田大学大学院教育学研究科.
- チャンプレン、バジル・ホール (1893) 『チャムブレン英文典』 東京：共益商社書店.
- 豊田實 (1939) 『日本英學史の研究』 東京：岩波書店.
- 長谷川博 (1998) 「外国語をカタカナ表記する弊害」『研究論集第68号』 大阪：関西外国語大学／関西外国語大学短期大学部.
- 藤上隆治 (2008) 「英語のストレスとリズムの理論と実際 — 認知的な音声指導のために —」『桜美林国際学論集 Magis No. 13』 東京：桜美林大学大学院国際学研究科.
- 眞砂薫 (2004) 「表音法と言語学的説明 — 英語教育の改善へのステップ —」『近畿大学語学教育部紀要第 3 卷第 2 号』 東大阪：近畿大学語学教育部.
- 松坂ヒロシ (1981) 「何を規範とするか」『英語教育ジャーナル 7月号』 東京：三省堂.
- 森住衛 (1978) 「アクセントのある重点的指導」『英語教育 6月号』 東京：大修館書店.
- 和田利正 (1998) 「フランス語初学者に仮名発音表記は必要か」『京都外国語大学研究論叢第51号』 京都：外国語大学研究国際言語平和研究所.
- O'Connor, J. D. (1980). *Better English Pronunciation, Second Edition*. Cambridge: Cambridge University Press.

資料

(資料に転記した例に引いた下線は藤上による)

1. 破裂音 ([t]と[d]) の未開放

音素 /t/ と /d/ の異音である [t̚] と [d̚] は語末では解放されない。つまり、舌が調音点に達して終わりである。従って、発音されないのであるから、カナ表記はない。次の2つの環境で異なるカナ表記が観察された。

(i) 語末に現れる場合 (短母音のあと)

前の音に続けて促音 (小さな「ッ」) を表記している。

What? [ワッ] One hundred. [ワンハンドレッ]

(ii) 語末に現れる場合 (子音のあと)

この環境では、単にカナで表記されていないことが観察された。

All right. [オーライ] Are you cold? [アユコール]

2. 歯茎音化

/θ/ は調音点の近い [t] として認識され、カナ表記でもタ行の文字が使われている。現代の日本語の中では、多くの場合、[s] に置き換えられる発音である。ただ英語の方言や外国語として英語を学んだ外国の学習者の中には、[t] あるいは、[f] で置き換える場合もあるようである。また、*Newsweek* (March 7, 2005, “Who Owns English?”) によれば、国際線のパイロットが交信する際、/θ/ (three) のような弱い音ではなく、はっきりと発音できる [t] (tree) がよく用いられるとの指摘がある。

Thank you. [タンキユ] One thousand. [ワンタウスン]

Nothing better. [ナテンベタ]

3. 二重母音の長音化

/oʊ/ は [ɔ:] として認識されている。カナ表記でもオ段の文字と長音記号が使われている。日本語音の中でも /o/ と /u/ の連続音はしばしば [ɔ:] と発音される (例: 学校 [がっこー]、高校 [こーこー] など)。この日本語の音変化がこの二重母音の長音化に影響を及ぼしているかもしれない。

Go ahead. [ゴーへー]

Long and short that is so. [ロンゲンシヨ、アツソー]

4. 二重母音の短母音化

(i) /aʊ/ は [a] として認識され、ア段の文字が使われているが、常にではない。

Look for it up and down. [ルックフオリ、ラップムダン]

(ii) /ei/ は [e] として認識され、エ段の文字が使われている。

Get away. [ゲラウエ]

5. 長母音の短母音化

/i:/ は [i] として認識され、イ段の文字が使われている。please に頻繁に観察される変化である。文強勢を受ける内容語の see でも短母音化が見られる。

Please tell me exactly. [プリズテルミ、イグザクリ]

Give me, please. [ギミプリズ]

Sit down, please. [シッダンプリズ]

Come and see me sometimes. [カマンシミソムタイム]

6. 脱落

(i) /ð/ の脱落

That is right. [アスライ] That is all the better. [アスオールベタ]

(ただし、Over there. [オアゼヤ] の場合には、[ゼ] という音を代用している。)

(ii) /v/ の脱落

Never mind. [ネアマイン] Over there. [オアゼヤ]

(iii) 連続する子音の一部の脱落

Please tell me exactly. [プリズテルミ、イグザクリ]

exactly の [ktl] は子音が 3 つ連続するが、真ん中の [t] が脱落する。これは、[t] で一旦、舌尖を歯茎から離して [t] を発音し、そのあとすぐに同じ場所に舌尖を当てて [l] を発音すると発音しにくいためである。

Abstract

In this paper I discuss how English pronunciations would be transcribed in *Katakana* letters as practically as possible, even though the sound structure of Japanese is different from that of English. I reveal why the *Katakana* phonetic notation is useful to Japanese learners of English as a foreign language, and discuss some problems of such notation. I also find how *Jitsuyou Eikaiwa no Hiketsu* * (1927) transcribes English sounds in *Katakana* letters to approximate the native pronunciations of English. I analyze *Katakana* phonetic notation in *Jitsuyou Eikaiwa no Hiketsu* from the viewpoint of sentence stress and then note that *Jitsuyou Eikaiwa no Hiketsu* tries to transcribe a variety of changes in pronunciation such as weakening of the function words like “and” and “of,” assimilation, and reduction. However, it does not show any primarily stressed syllables at all. Finally, I point out that Japanese learners of English may be able to pronounce English with stress-timed rhythm if the stressed syllables are indicated in the original *Katakana* phonetic notation.

* *The Key to Success in Practical English Conversation* (literally translated by the author of this paper)